
次世代教育研究開発センター

Next generation Education Research Center

NERC





2024年度 研究課題一覧

次世代教育研究開発センター 研究開発課題一覧

		研究開発課題名	研究代表者
学習研究部門	評価・分析 ユニット	1 データ基礎整備	森本容介 教授
		2 学習履歴データの分析と学生支援システムの提供	森本容介 教授
		3 放送教育・デジタル教材の調査研究	小林祐紀 准教授
	手法・教材開発 ユニット	4 質保証された単位認定のための試験手法の研究	加藤浩 教授
		5 生成AIを活用したスキル測定問題の作成支援方法の研究	平岡育士 准教授
		6 教材制作DXプロジェクト	加藤浩 教授
		7 電子書籍プラットフォームを核とする生涯学習デジタルエコシステムと流通方略の研究	山田恒夫 教授
	学修支援・交流 ユニット	8 遠隔教育におけるバーチャルラーニング commons (VLC)の有効性の研究	青木久美子 教授
		9 バーチャルラーニング commonsをめざしたオンライン学習グループの展開	宮本陽一郎 特任教授
		10 ライブWeb授業におけるジオロジーのバーチャル野外+リモート機器実習の開発	大森聡一 教授
		11 マイクロクレデンシャル共通枠組みによるグローバル大学連携	青木久美子 教授
経営戦略部門	タイプA (研究開発 テーマ公募型)	12 放送大学国際シンポジウムの開催	林徹 副学長
		13 放送大学コンテンツを活かした知的障害者の学習方法及び学修成果の評価に関する実践的研究	里見朋香 理事
		14 放送大学教材を用いた先取り学習の推進を軸とした高等学校との連携協力に関する研究	加藤和弘 副学長
	タイプB (研究開発 チーム募集型)	15 リカレント教育等の拡充のためのプラットフォームの整備	芝崎順司 教授
		16 放送大学の教育実践・蓄積を進化させた遠隔高等教育標準 (OUJモデル) の開発	森津太子 教授

各研究課題の2024年度の
成果報告等を
ぜひご覧ください

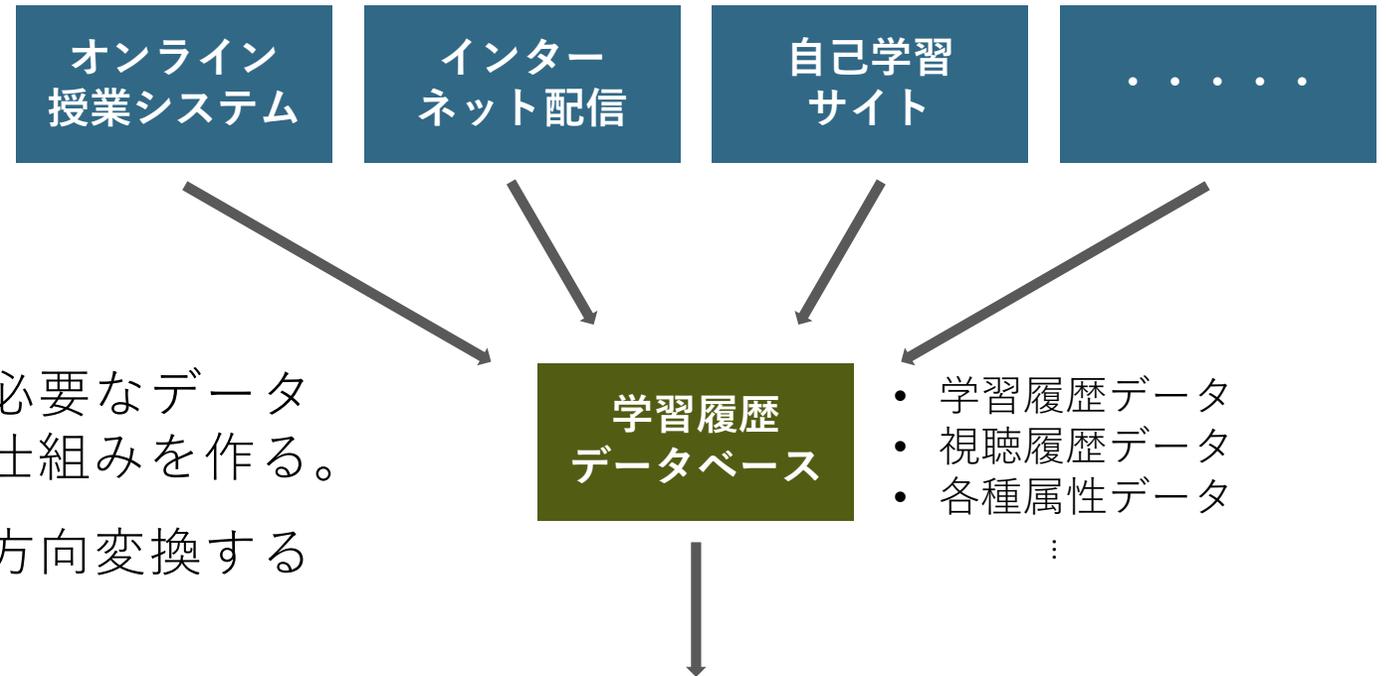
データ基礎整備

研究代表者：森本 容介



背景・目的・経過

- 学習状況の把握や教育改善のために、学習履歴データが活用できる。そのためにはデータ基盤が必要であるが、本学では整備されていない。
- 学習履歴データとその分析に必要なデータを蓄積し、研究者に提供する仕組みを作る。
- 学生番号にソルトを加えて一方向変換することによって仮名化。
- 主要な学内システムについて、データ設計、実装は一通り完了。



(当面は次世代教育研究開発センターで研究課題を実施する) 研究者に提供

データの設計例：オンライン授業

- 学習分析に使うことが想定されるデータを整理し、マスタ、スナップショット、イベントログに分類。
- サイト全体のマスタ2種類、イベントログ1種類、科目ごとのマスタ23種類、スナップショット7種類、イベントログ1種類を設計。
- 設計とSQLテンプレートの一部を、https://github.com/ymoris52/moodle_template で公開。

データの分類	説明	例
マスタ	科目や教材に関する情報	開講中の科目／科目内の小テストとその設定
スナップショット	データ抽出時点での科目内の状態	小テストの受験履歴／教材の活動完了の状態
イベントログ	イベントのログ	—



データの設計例：自己学習サイト

- SCORM 2004教材のランタイム環境データを取得し、分析に適したデータ形式に加工して蓄積。ランタイム環境データには、インタラクション（教材が記録する学習者の応答≡問題への解答に関連するデータ）が含まれる。

ランタイム環境データのデータ項目（一部）

- SCO番号
- 学生番号（仮名化）
- 試行回
- 閲覧回
- 日時
- cmi.exit
- cmi.success_status
- cmi.completion_status
- cmi.score.scaled
- cmi.session_time
- cmi.interactions（階層構造を持つデータを文字列にシリアル化）

インタラクションのデータ項目（一部）

- SCO番号
- :
- 日時
- cmi.interactions.n.id
- cmi.interactions.n.type
- cmi.interactions.n.result
- cmi.interactions.n.learner_response
- cmi.interactions.n.correct_responses.n.pattern（SCORM 2004の仕様上は複数であるが、自己学習サイトの教材では1つだけ）



学習履歴データの分析と 学生支援システムの提供

研究代表者：森本 容介

研究分担者：葉田 善章



目的・内容

2010年頃より教育分野においてもデータ活用が注目され、各種の研究が実施されている。関連団体の設立、研究会や講演会の実施、省庁や学術団体からの提言など、関連する活動も活発である。ICT活用による学生支援にも継続して取り組む必要がある。教育、学習の改善のためのデータ活用、学生支援のためのシステムの提供、導入検討を目的として、以下の4種の研究・作業を実施する。

- ① 学習履歴データの分析
- ② 学習解析基盤システムの構築
- ③ 学習支援システムKEYAKIの評価と改善
- ④ 学生向けアプリWAKABA拡大、及び学生候補者向けアプリAOBA拡大の提供



学習履歴データの分析

- 令和6年度は、学習履歴データベースの整備（「データ基礎整備」で実施）後に、蓄積した学習履歴データに対して基礎的な集計、分析を試行。
- 各種クロス集計、複数科目履修時の履修パターン（順次型、並行型）の調査、履修科目とリメディアル教材利用の関連調査などを実施し、学習動態を把握。
- 令和7年度は、機械学習などによって詳しい分析を行い、教育改善につながる知見の獲得や、学習支援への応用を検討。



KEYAKI・WAKABA放大／AOBA放大

KEYAKI

学修記録（成績）の提示や履修する科目の選択補助を行う学生向けシステム。これまでに機能の検討とモニター調査を実施。セキュリティ等を考慮し、実運用、もしくは他システムへの機能実装を検討。



AOBA放大：左からホーム画面、OCW科目（視聴とシラバス閲覧）、学習センター案内1、2

WAKABA放大／AOBA放大

学生向け／一般向けのスマートフォンアプリ。履修中の科目からインターネット配信への接続（WAKABA放大）や、各種の情報提供を行う。機能改善、運用を継続中。デジタル学生証など、新アプリへの統合を検討。

放送教育・デジタル教材の 調査研究

研究代表者：小林祐紀（心理と教育コース）

研究分担者：森下耕治（特命研究員）

研究目的

本学の教育改善に生かすため、**放送教育**、及び**デジタル教材の最新の動向**を調査する。

- 放送教育に関しては、特に、**NHK for Schoolが提供する学習コンテンツ**を包括的に調査する。得られた知見をもとに次世代の放送授業番組を構想しまとめる。
- デジタル教材（デジタル教科書、汎用のクラウドツール）に関しては、**海外(韓国)を含めて最新の事例**を収集し、本学へのデジタル教材の導入につながる知見をまとめる。



今年度の成果：放送教育

NHK for Schoolの番組制作者へのヒアリング

NHK for Schoolの利用教師、教育学の研究者へのヒアリング

- 学習者が自ら学ぶことを促す番組上の工夫、コンテンツが用意されている
- 多様な視聴方法に対応しようとしている（再生機能、プレイリスト機能）
- 学習者が主体的に学ぶようにストーリー展開を重視している
- 一斉視聴、グループ視聴、個別視聴を授業内で使い分けている
- 学習者の学び方に応じた動画視聴方法の追求（個別最適な学び）



今年度の成果：デジタル教材

文献調査と訪問調査によって事例を収集する。

- 学習支援システムと汎用のクラウドツールの併用による授業の実施
- クラウドを用いて学習者同士の考えを「見える化」する取組
- テキストだけではなく多様な教材を用いた授業の実現（クラウド環境）
- 教師の授業づくりの意識に特徴（教師主導の講義の実施割合低い、個別最適な学びの実施割合が高い）
- 個別最適な学びとしての利用を想定した学習者用デジタル教科書
- 韓国ではデジタル教科書としてAIコースウェアが使用されており教育データの蓄積、利用が検討されている（韓国）
- デジタル教材を活用して学習を進めることが前提の紙のテキスト（韓国）



質保証された 単位認定のための試験手法の研究

研究代表者：加藤 浩（情報コース教授）
浅井 紀久夫（情報コース 教授）
久保田 悟（次世代教育研究開発センター 特命研究員）

背景・目的

【背景】

放送大学ではBYOD(利用者の情報環境)でオンライン試験を実施
⇒受験者の端末や通信環境が貧弱である可能性

【目的】

端末や通信環境が貧弱であっても実施可能なオンライン試験の不正防止システムを研究開発する。



アプローチ

試験の状況を録画して、試験後に確認

試験実施中は端末や通信環境にかかる負荷を極力抑えることで、試験が中断する危険性を低減

AIを用いて不正行為を認識

学習済みのAI行動解析システム（VP-Motion）に、オンライン試験中の不正行為を転移学習（ファインチューニング）して認識

動画データの解像度を下げる

動画データの解像度と認識性能の関係を明らかにし、許容限度まで解像度を下げる

動画データのフレームレートを下げる

単に下げるだけではなく、サンプリングを動的に変化させる



2024年度の実績

10月～12月

不正行為動画収集のためのWebシステム開発

- 放送大学研究倫理審査

12月～1月

不正行為動画収集実験実施

- 放送大学学生を対象にFacebook, X, Wakabaで公募
- 95名分のデータを取得

1月～3月

行動解析ソフトVP-Motionによる不正行為検出予備実験

- スマホや印刷教材など、具体的に物が映り込んだ場合の識別ができています。
- 横を向いたり座り直すなど、大きく動く場合の識別ができています。
- 離席した場合の識別ができています

生成AIを活用した スキル測定問題の作成支援方法の研究

研究代表者：平岡齊士
加藤 浩



研究の概要

背景

教育の質を向上させるためには、適切な試験問題の設計が重要
しかし、試験問題作成は労力と専門的な知識を要する → 支援が必要

研究の目的：生成AIを使って、試験問題の改善・作成ができるツールを作る

1. **改善提案**：与えられた試験問題に対して、改善提案（言語情報→知的技能）をする
2. **類題作成**：単位認定試験問題の過去問題から、単位認定試験問題の案を生成する
（＝単純な類題 or 改善された類題）
3. **問題作成**：シラバス（学習目標）と教科書テキストから、単位認定試験問題の案を生成する
（＝学習目標の達成を確認できる問題）

期待される効果：以下の支援

- | | |
|-----------|--------------------------------|
| 新規問題作成： | 学習目標の達成を確認できる試験問題の作成 |
| 既存問題改善： | 現状の試験問題の評価→改善 |
| 問題作成労力軽減： | 繰り返し受験可のテストに必須の「同レベル&異なる問題」の作成 |
| 教育設計改善： | シラバスに記載している学習目標と試験問題との整合の確認 |

2024年度の進捗

進捗1：生成AIによる問題作成・改善の課題

著作権問題について

進捗2：現状の試験問題の傾向分析

単位認定試験問題の問題特性の分析

進捗3：設計された試験とよくある試験の比較

よい試験問題を定義するために、

インストラクショナルデザインの観点から設計された試験とよくある試験の特徴を比較

平岡齊士, 徳永恵理子, 鈴木真保(2025)教育設計の考え方に基づいた試験の特性ーよくある試験との比較ー,
日本教育工学会2025年春季全国大会

進捗4：生成させる問題の条件案

1. 学習目標と整合している
2. 単なる知識確認ではなく、スキルを問う
3. 学習者の学習に対してフェアである



教材制作DXプロジェクト

次世代教育研究開発センター：加藤浩、葉田善章、柳沼良知
放送部企画編成課：開原修、青木尚哉

目的・アプローチ

目的

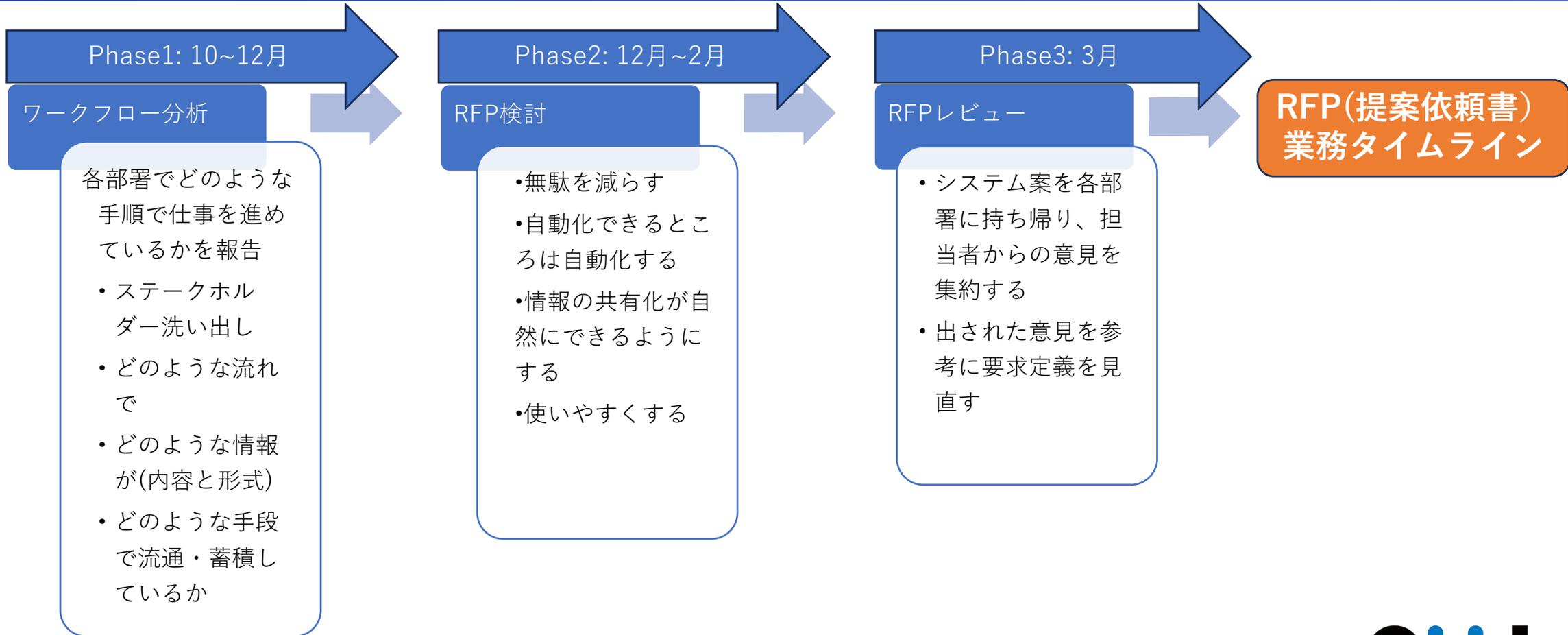
- 教材制作関連部署間で発生している無駄なコストを削減する。
- 教材を再利用・水平展開する際の手間を軽減する。
- 各部署内で独立に作られている(ようとしている) 管理システムを統合して、分散したシステムにかけているコストをトータルで削減する。
- 教材の分析を容易にして、内容の改善や教材研究に役立てる。

アプローチ

- 印刷教材、映像素材、完プロ、ラジオ音声、などのコンテンツとシラバス、台本、字幕、著作権情報などを一元的に管理して、教材制作に関する情報の共有と流通を容易にする。



2024年度実績



ソリューション案

1. コンテンツ管理システム（⇒2025年度開発）

各種システムにて個別に管理されているメタデータや成果物（ロケ素材、収録素材、放送用素材、ラジオ音声素材、印刷教材、台本、PowerPointファイル、字幕情報など）を一元管理して、教材制作に関する情報の共有と流通を容易にする。

2. ノーコードツール＋ワークフローによる文書管理

学園内外における申請・依頼・確認などのやり取りのシステム化（データベース化、使いやすいUI、ワークフロー可視化等）を、学園内メンバー自らがノーコードツールツールを使い開発することで、長期的で安定した開発・改修・更新・維持を可能とする。



電子書籍プラットフォームを核とする 生涯学習デジタルエコシステムと 流通方略の研究

研究代表者：山田 恒夫



(当初2年度計画)

- 放送大学の国際化ばかりでなく運用コストの中長期的な削減のために、印刷教材の電子化、オンライン配信は喫緊の課題となりつつある。
- 本学の基幹科目である放送授業科目での使用を想定し、放送番組教材、印刷教材、そして形成的評価にも対応できる通信指導問題を統合したAll-in-Oneマルチメディア学習管理プラットフォームのプロトタイプを構築する。

(単年度で中間評価、2024年度分)

- 開発システムは、放送授業科目における印刷教材の電子化と個別最適な学びを実現するために、電子書籍型とし、かつ学習活動（いわゆる学習履歴データ）を記録できるものとする。
- 開発する電子書籍型コンテンツは、単なるPDFではなく、放送授業番組ビデオ、通信指導問題（確認テスト）を融合させ、学習ログを保存できる、さらにアクセシビリティ機能を有するマルチメディア教科書がのぞましい。



開発内容（2024年度要求定義書）

開発する「電子書籍型学習管理プラットフォーム」システム（プロトタイプ）の構成または業務は次の通りである。

- (1) 学習者用電子書籍ブラウザの開発
- (2) 電子書籍型学習管理配信システムの開発と実装
- (3) 既存教材のマイクロコンテンツ化（学習オブジェクト化）とカリキュラム・シラバスデータベース（1edTech コンソーシアムのCASE仕様の学習目標ルーブリックリポジトリ）との連携

※ CASE： Competencies and Academic Standards Exchange



1. 国際ボランティア学 2024

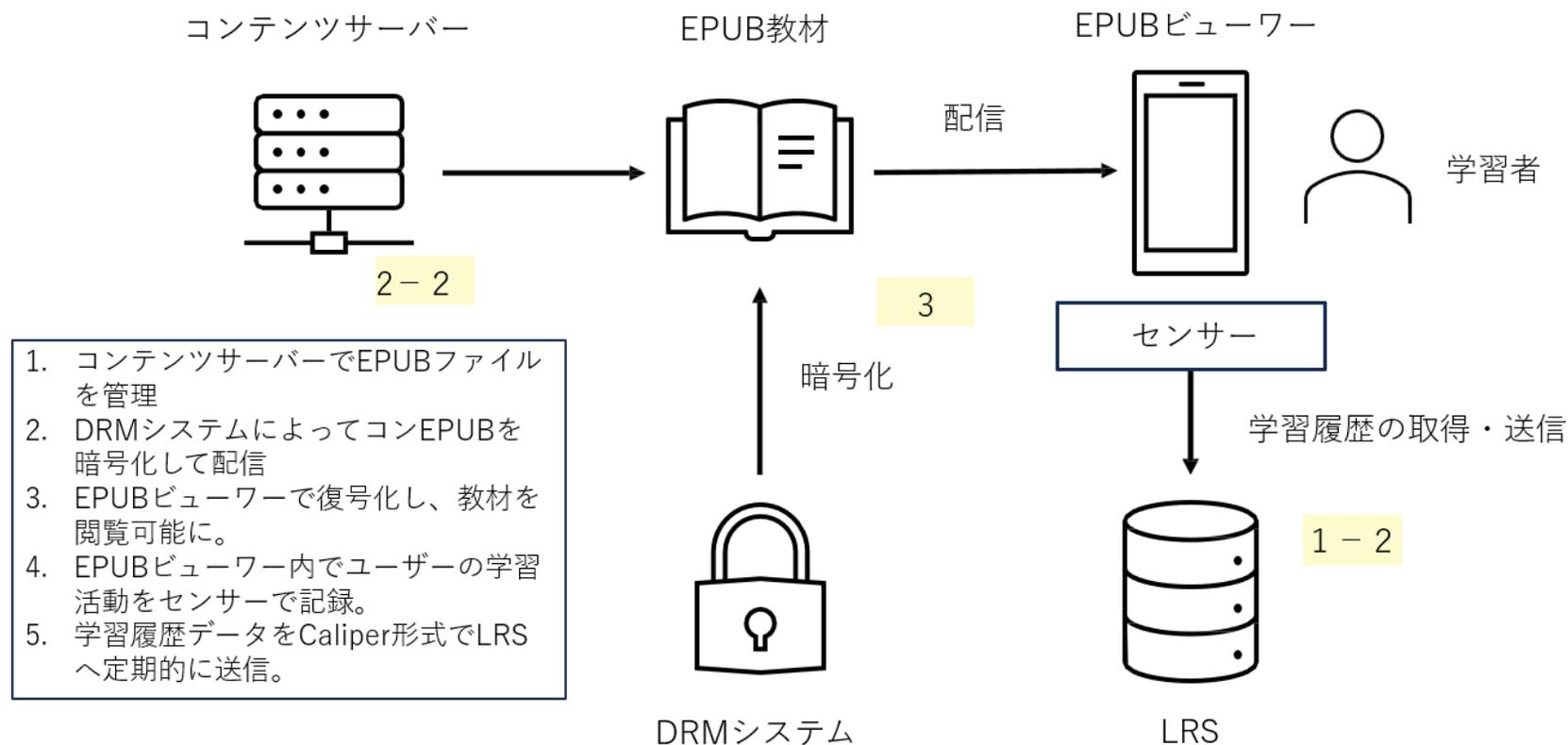
山田恒夫



《学習のポイント》 ボランティアおよびボランティア活動の定義と特徴、国際的な文脈でのボランティア活動の意義、学問としての国際ボランティア学の概要を紹介する。隣接領域の学問と関連させながら、国際ボランティア学の学問的な特徴とその体系、基本的な方法論について説明する。本科目の構成とその学び方を解説する。



EPUB配信システムのイメージ図



1. コンテンツサーバーでEPUBファイルを管理
2. DRMシステムによってコンEPUBを暗号化して配信
3. EPUBビューワーで復号化し、教材を閲覧可能に。
4. EPUBビューワー内でユーザーの学習活動をセンサーで記録。
5. 学習履歴データをCaliper形式でLRSへ定期的に送信。



遠隔教育における バーチャルラーニングコモンズ (VLC) の有効性の研究

研究代表者：青木 久美子
橋本 健朗
宮本 陽一郎
芝崎 順司
山岡 泰幸

背景と目的

背景

遠隔教育では、学生同士の交流不足が孤独感や孤立感を招き、大学への帰属意識の低下につながっている。学習センターも、全ての学生が自由に利用できるわけではなく、物理的に離れた学生同士が学び合い、交流する機会は限られている。また、学習センターのサポートサービスは利用時間や場所に制約がある。

目的

上記課題に対処するため、本研究では2Dメタバースを活用したバーチャルラーニングコモンズ (VLC) の構築・実装を行う。VLCに、学生や教職員が時間や場所に縛られずに交流できる新たなプラットフォームとしての機能をもたせることにより、学生コミュニティの強化を図る。

実施状況

今年度実施したVLC上の活動

契約：富士ソフトのFAMcampusを使用（100 ID・100GB/月プラン）

登録累計ユーザー数**131名**（2025年3月14日時点）

- プロジェクト打ち合わせ
- オンラインスタディグループ（OSG）ティーチングフェロー（TF）コロキウム アフターOSGコロキウム
- 大学院オンライン授業科目「Eラーニングの理論と実践」「情報とコミュニケーション」科目受講生受講後交流会
- 海外モニターの集い
- 群馬学習センターのサークル活動：「英語で学ぶ源氏物語」「ニュースで学ぶ英語」「VLC運用打ち合わせ」「手芸愛好会ミーティング」「英語多読」

インフラ達成状況

- VLC環境の整備
- アカウント申請と会議室予約システムの作成
- VLC上のアバターの表示名をユーザーが変更できるようにするカスタマイズ完了
- 本学シングルサインオン（SSO）との連携準備：shibboleth対応

ユーザーの反応

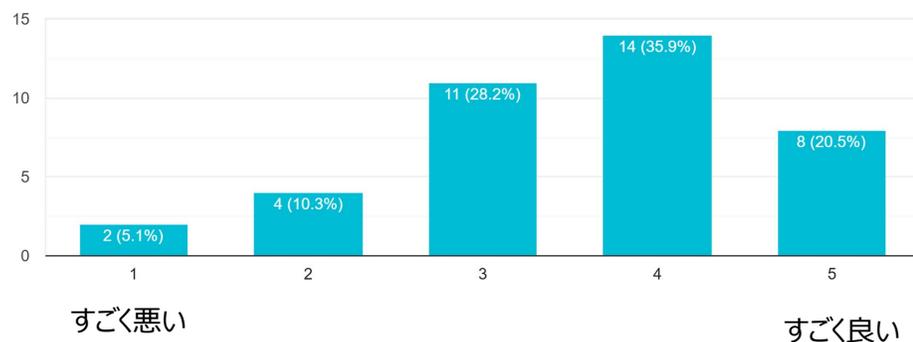
アンケート調査

期間：2025年3月4日から3月13日まで

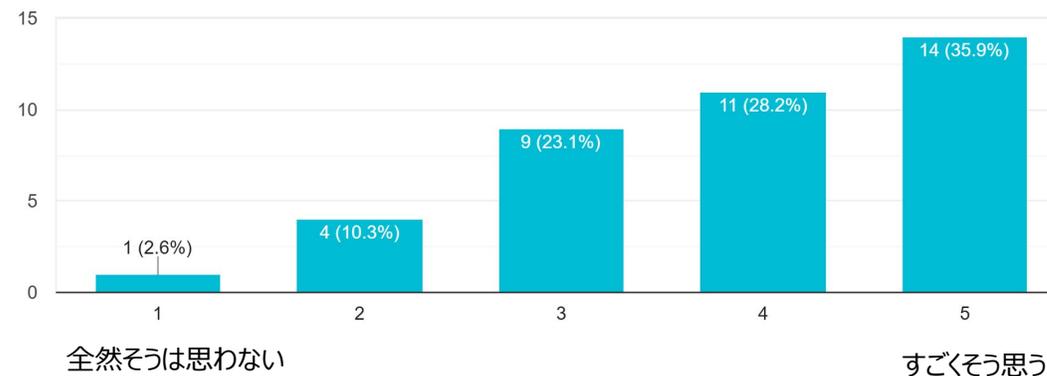
対象：アカウント保持者120名（2025年3月4日時点）

- 40名から有効回答（回答率33%）

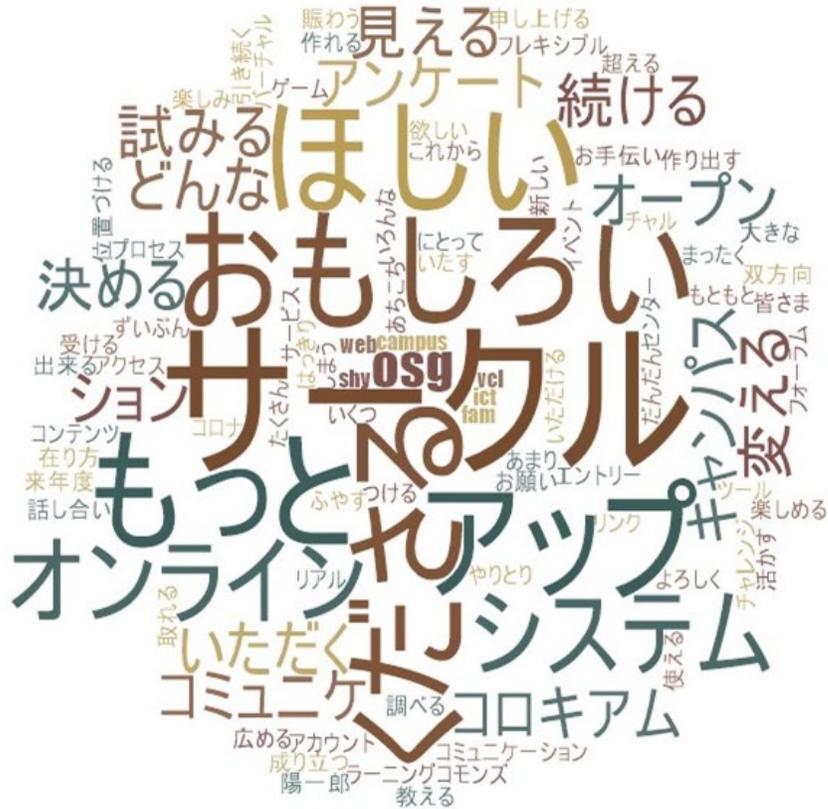
VLCの第一印象をおたずねします
39件の回答



VLCを今後も使ってみてみたいと思いましたか。
39件の回答



ユーザーの期待と課題



課題

- SSOと連携すると、ポテンシャルのユーザー数が一気に増加 → どのように管理していくか
- 外部ユーザー（卒業生や同窓生、及び将来の入学希望者等）のアクセスをどこまで認めるか
- マニュアルの整備や事前研修、およびテクニカルサポートをどのように行うか
- 学生の自主的な企画提案をどのようにして募集するか
- どのように様々な活動企画に優先順位をつけて、広報してヒトを集めるか
- 学習センターにおける学生の自主的な活動でどのようにして横のつながりを広めていくか
- トラブル発生時（ハラスメントや荒らしなど）の対処方法をどのように考えるか

バーチャルラーニングコモンズをめざした オンライン学習グループの展開

研究代表者：宮本 陽一郎

研究分担者：橋本 健朗，青木 久美子，佐藤 智徳

Zoomを活用したOSG（オンライン学習グループ）の実施

第1学期

◇ 「グローバル時代の英語」 OSG

TF（ティーチング・フェロー）：伊藤真利子、小林明美、鈴木和子

募集：20名 応募：20名 毎週月曜21:00-22:00 Zoom開催 全14回

◇ 「アメリカの芸術と文化」 OSG

TF（ティーチング・フェロー）：佐藤智徳、佐藤諒

募集：15名 応募：14名 毎週火曜21:00-22:00 Zoom開催 全14回

第2学期

◇ 「グローバル時代の英語」 OSG

TF（ティーチング・フェロー）：伊藤真利子、小林明美、鈴木和子

募集：20名 応募：20名 毎週月曜21:00-22:00 Zoom開催 全14回

◇ 「アメリカの芸術と文化」 OSG

TF（ティーチング・フェロー）：佐藤智徳、佐藤諒

募集：15名 応募：16名 毎週火曜21:00-22:00 Zoom開催 全14回



OSG（オンライン学習グループ）の内容

◇ 「グローバル時代の英語」 OSG

- 「鉄壁の英語苦手意識を持つ」ことを参加条件とするリメディアル・コース。
- 「世界一楽な宿題」を課し、自分の最も関心ある、予備知識豊かなトピックについて、毎週1点以上インターネット上の資料を紹介。英語の摂取量をストレスなしに増やす。
- 文法・ヴォキャブラリー以外に必要なとされるリーディング・スキルを涵養する練習問題を課す。

◇ 「アメリカの芸術と文化」 OSG

- 参加者の多様な社会経験と授業内容とのあいだの橋渡しを行うことにより、各授業の理解をサポートする。
- 事前課題への回答をメール/LMSで募集し、回答をTFがレジュメとして編集。
- レジュメに基づく自由なディスカッション。学期後半には反転授業にシフト。

オンライン学習グループ第2学期末アンケートに寄せられた声

- 何よりも学びを共有することの価値を知りました。
- 学習仲間ができる事により、学習の継続に繋がったと思います。
- 今回の『グローバル時代の英語』オンライン学習が終わってしまうのはとても寂しく、別の形でも良いので継続編を作っていただけたらうれしいです。今後も共に勉強をした仲間やサポートして下さった先生方と繋がってより勉学を深めたいと思います。
- 終了してみると英文を読むこと、聞くことの抵抗がなくなっているのに気づきました。自分にとって一段、階段が上がったような感覚です。この感覚を次につなげるのが今の目標です。
- 通信教育である放送大学ではあり得ないと思っていたコンスタントな学生との横のつながり、先生たちと直接お話しできる場はとても貴重なものでした。
- 通常の学習（放送授業と印刷教材を中心に勉強する）と比べて、たぶん100倍くらい勉強した。
- このような活動は大変意義深いものであると感じており、学生の立場ではありますが何かお手伝いできることがあればボランティア等でお手伝いできればとも思いました。
- このような試みが他にも行われていると放送大学の価値がさらに高まると思います。



ライブWeb授業における ジオロジーのバーチャル野外 + リモート機器実習の開発

研究代表者：大森聡一
青木久美子



背景, 目的

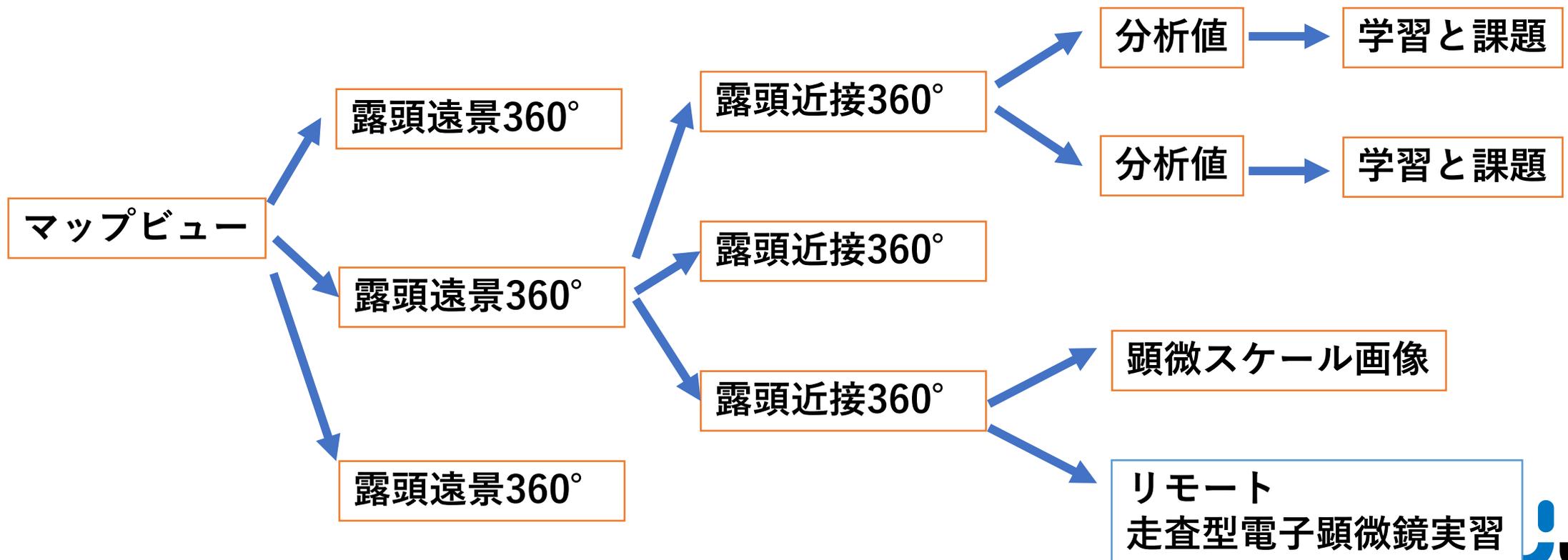
- 遠隔教育における実験実習に, ICT利用による新たな方法が登場
- ジオロジー (地球と生命の歴史を研究する分野) の野外調査を入り口として, バーチャル＋リモートで, 部分的にはリアルよりも良い実験・実習教材を作成する
 - さまざまな深さのアノテーションを加え, リモート実験に接続して「リアルよりも良い」教材を目指す
- その手法を横展開し, 教材作成の一手法としてバーチャル実験・実習を広める

2024年の成果

- バーチャル演習のバーチャル環境の構造とインタラクティブ要素の初期設計を行った
- 2～3月で現地調査を行い，素材画像を収集した。
- 2025年度のライブWeb授業の科目設計を行った。
- 横展開として，文化人類学・考古学の鶴見先生のアンデスにおけるフィールドワークの教材化を計画に含めることとした。

インタラクティブ要素の初期設計

ジオロジー（地球と生命の歴史を研究する分野）の教材として、
77万年前の地磁気逆転を記録している千葉県市原市の地層を対象とする



マイクロクレデンシャル共通枠組み によるグローバル大学連携

研究代表者：青木 久美子
山田恒夫
山岡 泰幸

背景と目的

背景

日本国内でマイクロクレデンシャルの認知度が高まる中、幾つかの大学がデジタルバッジを導入し始めている。本学においても、インターネット配信公開講座（AOBA）のうち、キャリアアップ支援認証制度に対応した講座を修了するとデジタルバッジが発行される。

目的

現在、多くの大学がマイクロクレデンシャルをデジタルバッジとして個別に発行しているが、普及に伴い、質保証・信頼性・透明性、さらに発見性やアクセス性の確保が課題となっている。これらを解決するには、**共通のフレームワークと記述言語**が不可欠である。本研究では、米国で開発された**CTDL（Credential Transparency Description Language）**を日本向けに適応させ、日本語によるマイクロクレデンシャルの登録・検索が可能なレジストリの構築を目指す。



進捗状況

米国Credential Engineとの共同

CTDLの開発元である米国非営利団体のCredential EngineのCTOと会合を開き、放送大学でCTDLのローカライズを行うことのオーソライズとそのため技術的アドバイスを確約

OUJのCredential Engine Sandbox環境の構築

Credential EngineのCTOを介して、OUJが独自にデータベースを構築する試行を行うSandbox環境を構築

ユーザインターフェース (UI)のローカリゼーションプロトタイプ

一般財団法人オープンバッジ・ネットワークを傘下に持つネットラーニング社に業務委託
クレデンシャルレジストリ（登録画面）とクレデンシャルファインダー（検索画面）のUIを日本語化



03

マイクロクレデンシャル連携
グローバル大学連携
による

日本語UIプロトタイプ

クレデンシャル登録

NAME
クレデンシャルの正式な名称を入力してください
数理・データサイエンス・AI講座(リテラシーレベル)

DESCRIPTION
クレデンシャルの概要および説明を入力してください(15文字以上)
数理・データサイエンス・AIを日常生活や仕事等の場で使いこなすための基礎的な素養を身に付けること、そして、学修した知識・技能をもとに、不安なく適切にAI等の恩恵を享受し、説明し、活用できる

PRIMARY ORGANIZATION
発行元である組織のCTIDを入力してください
(例) ce-xxxxxxxx-xxxx-xxxx-xxxx-xxxxxxxxxxxx
ce-cd6f7e25-ad19-4bcc-a68a-586c9f228eb3

主要組織における役割
組織と作成しているクレデンシャルとの関係のタイプをすべて選択してください
 所有者 著作権者 作成者 提供者 公開者 更新者 失効者

次へ

放送大学

クレデンシ... キーワードを入力してください

OpenBadge Active 数理・データサイエンス・AI講座(リテラシーレベル) 導入A	OpenBadge Active 数理・データサイエンス・AI講座(リテラシーレベル) 導入A
Certificate Active データサイエンス基礎	Certificate Active テスト クレデンシャル 07
MicroCredential Active サンドボックスでのクレデンシャル	MicroCredential Active テスト クレデンシャル 07
CertificateOfCompletion Active テスト クレデンシャル 06	Certificate Active テスト クレデンシャル 05
Certificate Active テスト クレデンシャル 05	Certificate Active テスト クレデンシャル 04

< 1 2 - 1603 1604 >



課題

- 日本にはNQF（国家学位資格枠組み）が存在しないため、マイクロクレデンシャル等に関する標準言語が確立されていない
- CTDLをローカライズするにあたって、ステークホルダーの合意を得ながら用語を一つ一つ定義していく必要がある
- CTDLで定義されていることがあまりにも広範囲で詳細にわたっているので、どこから手をつけるかを限定して決定しなければいけない
- 構築したレジストリが広く活用されるように、中立的な立場で普及活動をしなければならぬ



2024年度 放送大学 国際シンポジウム

研究代表者: 林徹

二河成男 朝倉富子 苑復傑 山岡龍一

鶴見英成 青木久美子 石崎克也 山田恒夫

伊藤嘉規 梶原佳奈子



第一部

テルブカ大学副学長 Dr.Rahmat Budiman氏

Lesson learned from Universitas Terbuka: Providing quality education across the border

講演の主なテーマ

- テルブカ大学について
- 20代の学生が学生数の多くを占めていること
- 海外にいる学生への学生サービスについて
- 日本在住の約2,000人のテルブカ大学生について



↑ Dr.Rahmat Budiman氏 講演の様子



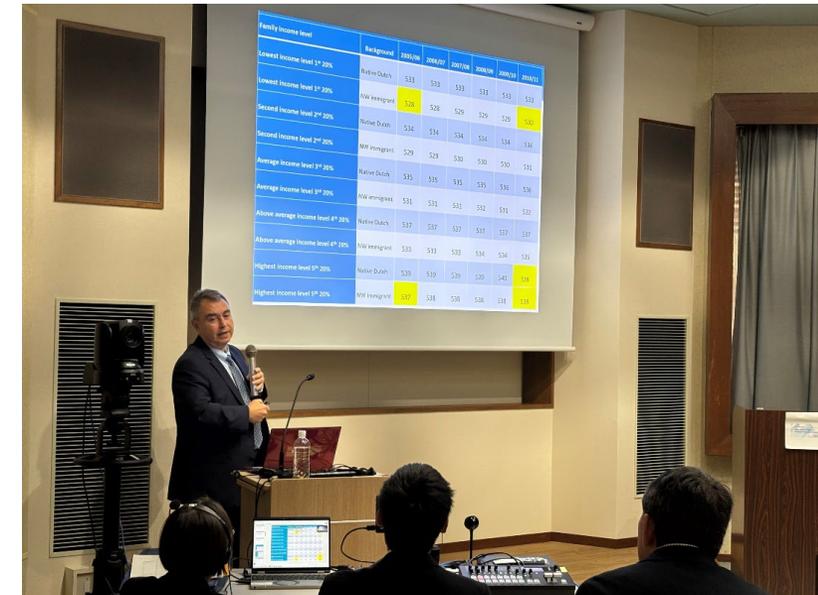
第二部

ティルブルク大学教授Prof. Kutlay Yagmur氏

Promoting diversity policies in higher education: Aims of inclusive education programs in the Netherlands

講演の主なテーマ

- 特に初等・中等教育におけるオランダの移民教育に
現存する課題
- 移民人材を社会に受け込ませ活躍させることを目指した
MOSAICプログラム（特にロールモデルの創出）について
- 教育国際化のためのオランダの組織 NUFFIC と
- オランダ公開大学 (OUNL) について



↑ Prof. Kutlay Yagmur氏 講演の様子



第三部

講演者2名と山田恒夫教授、青木久美子教授、大橋理枝教授とのラウンドテーブル

ラウンドテーブル内容

- 通信制教育を通してどのように物理的・精神的な障壁を乗り越えていくべきか
- 通信制大学同士が国際化の進展に伴いどのように手を携えていくべきか



↑参加者の集合写真





テルブカ大学学生との座談会

日時：2024年12月5日 14：00～16：00

場所：西研究棟8階ラウンジ

・放送大学の学内見学の感想

放送スタジオ見学が最も印象に残っている。
テルブカ大学の学生になってから一番いい経験だった。

・質疑応答

Q テルブカ大学ではどのように勉強しているのか。教科書なのか、オンライン上なのか。

A 3つの種類ある。

①オンライン講義 インタラクティブな講義

②録画講義 質問はメールで受け付け

③教科ごとの課題提出 8週間かけて課題を提出する

Q おそろいのジャケットはなに？学生みんな持っているのか。

A 大学から支給される。インドネシアの大学では支給のジャケットがよくある。
試験の時に着ている。

Q インドネシアの若者はテレビを見るのか。

A インドネシアでも若者はテレビを見ない。SNS等の方が人気。情報収集はSNS

Q 通信で大学を続けられている秘訣は？

A 時間管理等を大学がサービスとしてやっている。

放送大学コンテンツを活かした 知的障害者の学習方法及び学修成果の 評価に関する実践的研究

研究代表者：里見 朋香

放送大学コンテンツを活かした知的障害者の学習方法及び学修成果の評価に関する実践的研究

研究課題の目的

- 「誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会」を目指す社会像として掲げ、その実現に向けて、大学は多様な学生の受入れを通じた教育研究の一層の高度化の観点からも、地域や社会への貢献の観点からも、特別支援学校等を卒業した後の障害者の学びの場としての役割を果たすことが求められている。平成31年3月「障害者の生涯学習の推進方策について（報告）」（文部科学省 学校卒業後における障害者の学びの推進に関する有識者会議）
- 「学びたい人が、いつでも、どこでも、学べる開かれた大学」放送大学 教学Vision2027
- 「ひとりひとりに最適な学びを放送大学から」放送大学 教学Vision2027
- 社会的包摂の観点から、障害者をはじめとした地域の学びを支える取り組みを検討し、実施する。放送大学中期計画（令和4年4月-10年3月）計画7



< 目標 >

遠隔高等教育機関という本学の特性を活かした、知的障害者のための遠隔教育コンテンツの制作及び学習プログラムの開発



放送大学コンテンツを活かした知的障害者の学習方法及び学修成果の評価に関する実践的研究

令和6年度 実施内容①

- デモ版コンテンツの利用実践とそのフィードバックを受けた改善、専門家による校閲（千葉県内の特別支援学校高等部、千葉県内の福祉事業所、知的障害者の生涯学習支援団体など）
- 知的障害者の生涯学習支援者・団体等のためのデモ版コンテンツ利用マニュアルの整備
- 改善されたコンテンツ及び利用マニュアル（ベータ版）を放送大学のプラットフォームで全国に発信


 千葉県（教育委員会、県民プラザ、特別支援学校）との連携

仕事で注意を受けたとき・・・
 はるきさんは会社の印刷部門で働く社員。
 チラシを折る仕事をしている。
 ある日、はるきさんは小さなミスをしたことでチーフから注意を受けてしまう。
 動揺したはるきさんはイライラして、仕事の指示を忘れてさらに困ってしまう…。

失敗をしたり、注意を受けたりして
心の中がモヤモヤしたら、どう向き合えばいいの？
気持ちを落ち着かせ、自分に合った伝え方を学びながら
周りと相談する工夫を考えます

コンテンツ及び活用の手引は 放送大学ウェブサイトに掲載しています
<https://www.ouj.ac.jp/about/gakusyu-contents/>



障がいのある学生のための
学習支援コンテンツ

コンテンツについて
 放送大学では、テレビ、ラジオの放送やインターネットによる授業を行っています。本学ではその特性を活かし、学校卒業後の知的障がいのある方やその支援者が活用できる学習支援コンテンツの開発を進めてきました。
 令和5年度に、知的障がい教育の関係者の協力を得て、15分程度で3パターンの演出によるデモ版を作成しました。
 令和6年度には、デモ版コンテンツを特別支援学校高等部や障がいのある方の支援を行っている団体で利用実践していただき、課題等を確認し、改善を行いました。
 本コンテンツは、デモ版を改善したもので、知的障がいのある方の卒業後の社会生活、主に、職業生活の充実に資する内容になっています。是非、本コンテンツをご視聴・ご利用いただければ幸いです。

コンテンツの特徴
 アニメとドラマを併用しています
 支援者を補助する「活用の手引」を用意しています

お問い合わせ
 仕事の場の方で不安がある一歩先へは 相談しよう

放送大学コンテンツを活かした知的障害者の学習方法及び学修成果の評価に関する実践的研究

令和6年度 実施内容②

- 放送大学の既存コンテンツを利用した知的障害者のための教養的な生涯学習コンテンツの制作の検討
- 研究成果を共有するための全国シンポジウムの開催

↙ 千葉県（教育委員会、県民プラザ、特別支援学校）との連携



放送大学コンテンツを活かした知的障害者の学習方法 及び学修成果の評価に関する実践的研究

研究課題の成果

○動画コンテンツ（完成版）及び利用のための「手引」（スタディガイド）の公開（2025年5月予定）

放送大学学園のウェブプラットフォームで全国に発信予定

デモ版コンテンツ3点についても、注釈付きで公開予定

○放送大学の既存コンテンツを利用した知的障害者のための教養的な生涯学習コンテンツの試作（2025年度予定）



放送大学発のコンテンツを誰もが利用できるように
(OUJモデル)



放送大学教材を用いた先取り学習の推進を 軸とした高等学校との連携協力に関する研究

加藤和弘（責任者、放送大学副学長・教授）、岩崎久美子（放送大学教授）、
中谷多哉子（同）、辰己丈夫（同）、高橋慶匡（放送大学学園学務部長）、
齋藤雅彦（同 連携教育課長）、佐藤真由美（同 連携教育課長補佐）、
篠崎健太郎（同）、寺田聡（同 企画推進係長）、呑海沙織（筑波大学副学長）、
河野安勝（千葉県立長生高等学校校長）

研究の背景・目的

「放送大学学園中期計画」 計画11（抜粋）

学園の保有する映像等のコンテンツや制作のノウハウを活かし、他の大学・専修学校・高等学校等での教育や企業等の研修での活用へ提供する（後略）

「教学Vision2027」 アクションプラン⑪

（前略） 高大接続の観点から、高校教育との連携を視野に入れた教育活動を展開する。

<目的> 高大連携の具体的な制度化を目指し、そのために解決すべき課題を明らかにする。

1. 試行を通じた有効性と課題の把握
2. 現場におけるニーズの把握



主な結果（放送教材のモニター生へのアンケート）

あてはまると回答された上位の項目

- いつもと違う経験ができた
- 興味や関心を引いた
- 人と違うことができた
- 大学での学びを知ることができた

実用的な利益が得られたという回答は少ない傾向

自分が関心を持つテーマについて学べたことに触れた自由記述が目立った。

回答者16名

理解度

- 少しは理解できた：38%、まあ理解できた：56%

1科目あたりの適正金額

無料 31%、10000円未満 25%、10000～20000円 31%、

実施時期は全員が夏休みを回答。利用した機器はタブレット69%、スマホ25%

あてはまると回答された下位の項目

- 入試や総合型選抜に役立つ知識を得た
- 学力を高められた
- 学習へのモチベーションが高まった
- 自分のやり方にあった授業を受けられた

主な改善要望

- 講座がテキストを読み上げるだけで残念
- 用語の意味を載せてほしい
- 1コマが長いので小分けしてほしい
- 講師は写さなくてよい
- 視覚的刺激がないと集中しづらい（ラジオ）

主な結果（その他の調査）

第2学期 科目履修生の意見(全8名)

- 専門知識の獲得、大学進学の糧となるような実りのある体験、進路を考える上で役立つ、視野を広げ学びを深められる、自宅でも気軽に学びに向かうことが出来とても楽しく学習に取り組める、等。

教員を対象とした聞き取り調査

- 学習意欲の向上、進路選択への貢献、個別最適な学びの実現、自律的な学習能力の向上、地方における学習機会の提供、といった利点があると認識されていたことがわかった。

学校等ヒアリング

- 複数の私立学校より放送大学の教材等の利用について好意的な反応があった。公立の学校は教員が多忙で、高大連携に取り組む余裕がない様子。千葉県教育委員会との連携、長生高等学校での実績は、他の高校や教委への説明にあたって効果的。

DXハイスクール採択校等へのアンケート

- 「総合的な探究の時間」や課題研究に活用できそうなこと、高校では学べない分野や専門的内容を扱う科目への関心などが示された。但し、教員、生徒ともに多忙で今以上の学修、教育は困難との回答も多かった。



高大連携の制度化の可能性

OCWと印刷教材を利用した先取り学習の提案（個人、学校向け）

- 印刷教材の提供の形態について振興会との調整が必要。
- 質問への対応など学習者へのサポートをどう行うかが課題。
- OCW対象科目の見直しや、高校（生）向けの新たな教材提供方式の検討も必要。

学校図書室（図書館）に対する印刷教材の提供（廉価販売）

- 振興会との調整が必要。
- 探究学習向け、進路指導向けなど、用途に応じたパッケージの提案

科目履修生、選科履修生 としての高校生の受け入れ

- 学納金負担を極力軽減することが必要。
- 高校生にとってのメリットをどうアピールするかが課題。
- 教育委員会との連携が望ましい。



リカレント教育等の拡充のための プラットフォームの整備

構成メンバー(2024年度)

芝崎順司	教授 (代表者)	情報コース
辻靖彦	教授	情報コース
森本容介	教授	情報コース
荒井幸男	情報部長	
猪嶋哲也	情報推進課長	
今岡美優	情報推進課総務係主任	
開原修	放送部企画編成課専門職	
橋本健朗	教授	自然と環境コース
斎藤雅彦	連携教育課課長	



研究の目的・意義

- リカレント教育、リスキリング、資格取得へのニーズをとらえ、第2の軸として育てていく
- 「リカレント教育プラットフォーム」の研究開発
- 学習者のニーズから出発して適切なコンテンツに誘導できる仕組み
- コンテンツの体系的整備
- 寄付講座等によるコンテンツの開発と提供
- 放送大学に相応しいリメディアル教育の提供



研究の経過

- 学内コンテンツやプラットフォームの調査
- AOBA（インターネット配信講座）の機能仕様策定
 - 検索機能の充実
 - AIチャットボットアシスタント機能
 - AIを活用した学習履歴分析とレコメンド機能
 - サブスク립ション提供モデル
 - デジタルバッジの発行機能・ウォレットの配布
- リメディアル教育の提供
 - 自己学習サイトの見直し
 - リメディアル教育委員会との連携



放送大学の教育実践・蓄積を進化させた 遠隔高等教育標準 (OUJモデル) の開発

構成メンバー（2024年度）

森 津太子

（副センター長、学習研究部門長
テーマ2 代表者、心理と教育コース）

羽鳥 政男（事務局長、経営戦略部門長）

滝浦 真人（人間と文化コース）

辻 靖彦（情報コース）

橋本 健朗（自然と環境コース）

安池 智一（自然と環境コース）

中川 一史（センター長、情報コース）

足立 圭介（制作部）

石橋 丈（制作部）

工藤 元（オンライン教育課）

吉原 伸年（オンライン教育課）

小須田 東太（オンライン教育課）

神 研二郎（教務課）

中土井 孝亮（情報部 情報推進課）

佐藤 宏光（広報課）

オブザーバー：里見 朋香 理事

目的

本学がこれまでの長年の取組で培ってきた効果的な教育手法を、課題を克服しながらさらに進化させ、「遠隔高等教育標準（OUJモデル）」として確立し、全国で活用されるようにするための研究開発

- 先進性・優位性に根差したノウハウはマニュアルとして学内で利用されていても学外には可視化されておらず、大学として自覚的に取り扱ってきてもいない
- 経験知として蓄積されてきた教育方法が、現代の学生に効果的なものとなっているのかを今一度検討していく観点も重要
- 放送授業でマニュアル化された授業方法がオンライン教育やライブWeb授業といった別の授業形態ではあまり活かされていない
- コロナ禍後の本学の新しい取り組み（Web単位認定試験（IBT）、ライブWeb授業、ハイフレックス型面接授業）のノウハウもモデル化していく必要がある



研究の経過

【学内】散在する情報の集約・整理、経験知の可視化

- 学内向けの研修会／勉強会（OUJモデル・ラボ）を次年度より開催
 - 2カ月に1回程度、オンラインで開催し、ポータルサイト（アーカイブス）を用意
 - ビデオ録画したものを関連資料と共に掲載
 - 科目制作にあたって誰もがアクセスしやすい場所に情報を集約

【学外】遠隔高等教育の現状とニーズの調査

- 通信制の高等教育機関の科目・カリキュラム・授業の提供方法等の分析
 - 募集要項・大学ウェブサイト等からの情報の抽出
 - 新設大学の実態調査
- 遠隔高等教育のニーズに関するオンライン調査

